

【資料1】

＜4歳の指導課題の例＞

4歳の発達は自立の基礎ができた段階、集団生活の準備ができた段階であると考えられます。また、9歳の発達で、基本的な社会生活の準備ができた段階と考えられると言われています。18歳の力を付けなければ、就職できない、自立できないわけではないのです。下にあげた指導課題は、4歳児の50%以上ができるとされている内容です。最初から、この子には無理、難しいとあきらめず、子どもの成長する力を信じて指導・支援しましょう。

＜指導年齢4歳の指導課題＞	
<p>基本的生活習慣</p> <p>献立によって、はし、フォークなどを使い分けることができる 手洗いの動作が正しくできる 手洗いの意味が分かる テーブルを拭くことができる（食事—後片付け） 家族みんなにあいさつができる（両親にはおやすみなさい、兄弟にはおやすみ） チャックのとめはずしができる（排泄—排尿＜男子＞） トイレ用ペーパーを適量使うことができる（排泄—排便） 指示されなくても手を洗うことができる（排泄—手洗い） 洗った後、ハンカチで拭くことができる（排泄—手洗い） 石けんを使って洗うことができる（排泄—手洗い） ボタンのとめはずしが一人でできる 表・裏、前・後をまちがわずに衣服を着ることができる 一人で適当な衣服を着ることができる 立ったまま衣服を着ることができる ワイシャツ、上着をズボンの中に入れることができる チャックやホックのついた衣服を着ることができる ひもやボタンのついた衣服を脱ぐことができる 指示されなくても靴の左右がわかる 汚れた手足を石けんで洗うことができる 汚れた手足をきれいに洗い、拭くことができる 自分で髪をとくことができる ハンカチの用途がわかる ほころびを知らせ、繕ってもらうことができる 紙くずをとるこままわす捨てない</p>	<p>暮ら</p> <p>お金にはいろいろな種類があることがわかる お金が大切なものであることがわかる 銀行や郵便局のことを知っている 三度の食事を規則正しくとることができる 規則正しく睡眠を取ることができる 疲れたときは早く寝ることができる エアコンのスイッチを入れることができる（暑さ、寒さを判断） 休日とそうでない日の区別ができる 正月や水泳の季節がわかる 自分で傘をさすことができる 遊んだりせず歩くことができる 遠足など集団での歩行ができる 歩道があるところは、歩道を歩くことができる 交通量のほとんどない道路を横断することができる 信号のある道路を横断できる 横断歩道がわかる 補助車がついた自転車に乗ることができる 一人で近所に遊びに行くことができる 応答し、取り次ぐことができる（電話—受信） 番号を言えば、プッシュホンの番号を押すことができる 友だちと電話で話すことができる みんなのテーブルにはしを置くことができる ビデオデッキを使うことができる（再生） 学校の友だちと家の中で遊ぶことができる 学校の友だちと外で交流ができる 大人と一緒に、障害のない子どもと交流ができる 近所の障害のない子どもと楽しく交流ができる 形、色、大きさなどで分類することができる 3までの概念が理解できる 身近にある具体物を数えることができる 丸、四角、三角の形を書くことができる 簡単な指示や説明を聞いて、できるだけその通り行動できる 簡単な伝言や要望などを言うことができる 必要なとき助けを求めることができる ロッカーや靴箱に書いてある自分の名前を読むことができる</p>
<p>集団参加</p> <p>テレビ番組を自分で選んで視聴できる いろいろな遊具を使って遊ぶことができる ぞうきんを使うことができる ほうきを使うことができる ほんの少しの時間なら、一人で留守番ができる 電話の取り次ぎができる 指示をすれば、ごく簡単な役割を遂行できる 指示があれば参加できる 計画は立てられないが、計画に従うことはできる 順番を守って、乗り物の乗り降りができる 指示があれば、それに従って行動できる 乱暴に扱ったり、壊したりしない 順番を守って使うことができる 指示されたら、一人で自分で使った物を後片付けできる 用具を勝手に持ち出さない 指示すれば、「貸してください」が言える 壊れているかいないかわかる 川など危険なところへ一人で行くことはない 勝手に機械に触らない 指示すれば、簡単な機械のスイッチを入れることができる 道路へ急に飛び出したりしない 道路で遊んではいけないことがわかる 歩道と車道の区別がわかる 横断歩道を渡るときは車が止まってから渡ることができる 目上の人と話をすることができる 人の物はやたら触ったり、使ったりしない</p>	<p>職業意識</p> <p>物を力いっぱい投げることができる 物を力いっぱい引っ張ることができる かがんだ姿勢でじっとしていることができる 簡易な立ち作業で1時間程度働ける 得意な作業や興味のある作業なら意欲的にできる 明るい（職業態度—協調性） 周りの人と協調できる</p>



「指導年齢がわかる自立と社会参加を実現する個別の指導プログラム」上岡一世 著より（明治図書）
 ＊2歳から12歳までの指導課題がまとめられており、発達年齢にそった指導内容を考える上で参考になります。

＜キャリア教育啓発リーフレット（保護者用）＞

『子どもは自立する力を持っている』

『一人一人のライフステージを支えるキャリア教育』

特別支援学校にお子さんを連れていらっしゃる保護者の方から、「わたしがいないから、この子は自立する心でしよう」とか「学校にいる間はいいのだけど、その後はどうなるんや」という心配をお聞きすることがあります。

でも、親としての心配は心配として、「この子にはこの子の人生がある。この子が決めることなんだ」と思いながら、お子さん一人一人の社会人として、地域で生きる大人の一員として育てるためには、必要なことなのです。

キャリア教育とは、「児童生徒のキャリア発達（人間が社会の中や自己の置かれた環境の中で、その時期にふさわしい能力を身に付け、成長する過程）を支援し、それぞれにふさわしいキャリア（役割や価値観）を形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育。端的には児童生徒一人一人の勤労観や職業観を育てる教育」とされています。

言いかえると、ライフステージや発達段階に応じて求められる役割を果たそうとする意欲や具体的な力を育て、社会生活を主体的に生きる力を育てようということです。

子どもの「生きる力」を育てるには

「成長する力を信じる」

着替えや食事、学校に行く準備など、ついでにやらないから、親が何でも手伝ってやっているのではないのでしょうか。「今はできなくても、必ずできるように」と子どもを成長する力を信じて、慣れよく、丁寧に（我慢を心んで）、育てることで、身の回りのことが一人でできるようになります。

「一人でやりきらせる」

人には、それぞれやりやすい自分なりのやり方があります。それは、得意のある子ども達では、もったいなくしてしまいます。親から見ると、回りくどかったり、ただたどしいやり方であっても、その子の今の能力でできる一歩良い方法なのかもしれません。

「子どもの気持ちをささえる」

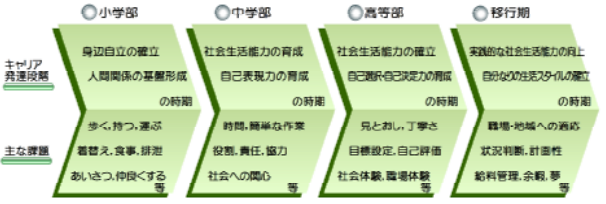
子どもの「がんばろう」という気持ちの源は、大好きなお父さん、お母さんを見てほしいという願いです。また、「お父さん、お母さん、大好き」という気持ちが、社会（学校）へ出て行くための力となるのです。

「サポーターをつくる」

「自立しつゝ暮らす」ということ。「一人で暮らす（自立）」ことは違います。何人も一人でできないならば、いかにしてサポートするかが重要になります。

将来の生活を見通して、小さいときからしっかり育てることが必要

『ライフステージに沿ったキャリア発達支援』



各学年におけるキャリア発達段階と主な課題を把握しながら、その学年に備えて進んでいくことが大切です。

「働くこと」「職業に就くこと」は、全ての人の大切なこと

障害のあるなしや、障害の程度にかかわらず、全ての人にとって「働くこと」「職業に就くこと」は、国民の義務であり、また、基本的な権利として大切なことです。「働かせるのはかわいそう」と思ってしまうことは、自分自身を認めてもらっていないことと同じなのです。

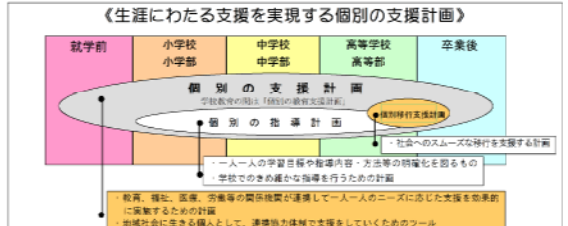
就職するために最も必要なことは本人の「働く意欲」と「態度」

市内の特別支援学校の各学級主任と進路指導主任の先生方に行った調査(2019)により、就職するために最も必要なことは、「学力」でも「作業能力」でもなく、「本人の働きたいという気持ち」であるということが明らかになりました。

- 第1位: 働く意欲や態度を身に付けていること
- 第2位: 働くことに合わせた体力があること
- 第3位: 働くことに興味があること
- 第4位: 働きたいという気持ちがあること
- 第5位: 働くことに自信があること

『個別の教育支援計画は、本人、保護者が主役』

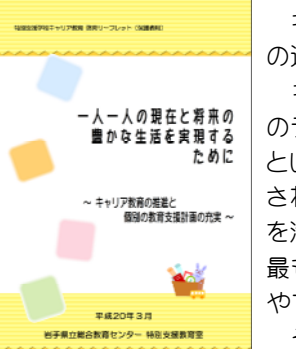
現在、全ての特別支援学校で作成されている個別の教育支援計画は、本人、保護者の願いや思いを学校・福祉・医療、労働等の関係機関が連携して実現させることが目的です。



＜個別の教育支援計画作成の準備（家庭）＞
①子どもの将来について、家族の中で話し合います。それぞれの考えや思いを共有することが大切です。思いが異なる場合は、話し合えるようになってほしいことをまとめます。

＜学校と連携して支援するためのポイント＞
①学校の教育に対して興味・関心をもつ（どんな教育をしているのか、子ども達の様子はどうかなど）

◆紹介◆
■特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック「理解編」
これからの特別支援教育の方向性や必要な力、支援制度の概要等について詳しく紹介。保護者の方にも役立つ情報も数多く掲載されています。



キャリア教育の推進には保護者との連携や協力は不可欠です。キャリア教育は、生涯の発達をそのライフステージに沿って支援するということから考えるとすでに作成されている「個別の教育支援計画」を活用して、具体的に推進するのが、最も効果的で保護者にもイメージしやすいのではないのでしょうか。

そこで、このページに示すような表紙(1ページ目)リーフレットを作成しました。各学校におけるキャリア教育の推進と個別の教育支援計画の充実を図る資料としてお役にください。

活用例とダウンロードについては以下をご覧ください。

- ＜活用例＞
・年度初めの個別の教育支援計画や個別の指導計画作成の案内(おたより)と一緒に配布する
- ・個別の教育支援計画作成にかかわる面談等に説明を添えながら個別に配布する。
- ・キャリア教育に関する保護者向けの研修会での資料として活用するなど

＜ダウンロードアドレス＞
<http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi>

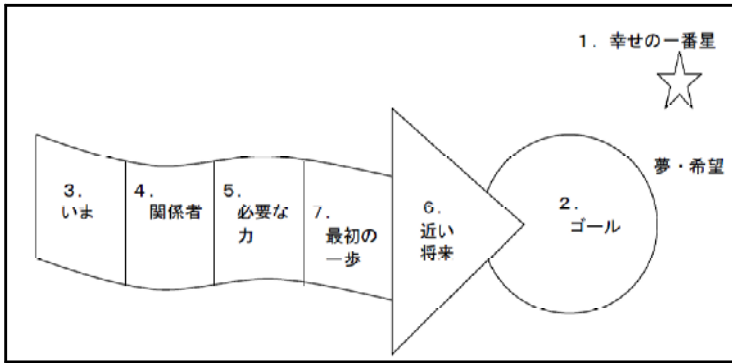
【参考3】

＜障害のある子のPATH を考えよう！＞

関係者との連携協力・関係を推進するためのPATH(Planning Alternative Tomorrow with Hope: 夢をもってもう一つの明日を計画する)の技法という方法の紹介です。個別の教育支援計画や個別の指導計画を立てる際に、保護者や関係機関と話し合いをもつ時などに有効と思われます。

＜ステップ＞

1. その子のことをイメージしてみよう。
 どんな子だろうか？
 何が好きなのか？ 誰が好きなのか？ 得意なことや苦手なことは？
 その子のもっている力と力の弱さは何か？
2. グループの中での役割を決めよう。
 本人，親，通常学級の先生，特別支援学校の先生，施設の職員，
 近所のおばさん，アドボケイト（権利を擁護する人），
 サポーター，ボランティア，など。
3. PATH (Planning Alternative Tomorrow with Hope) にトライ。



PATHのステップ

1. 幸せの一番星（夢や希望について語る）
2. ゴールを設定する・感じる
3. いまに根ざすこと（どこに私／私たちはいるのか）
4. 夢をかなえるために誰を必要とするのか
5. 必要な力（どんな力を増したらいいか）
6. 近い将来の行動を図示する
7. はじめの一步を踏み出す

【作成例】花巻養護学校中学部で作成された「SさんのPATH」

【資料4】

＜家庭でできるお手伝いリスト＞

子ども達にできる家のお手伝いをピックアップしました(120コ)。家族の一員として、その子のできる仕事や役割を家庭の中にしっかりと位置付けることが労働観の育成には大切です。お手伝いのポイントは、子どもにやりきらせることと、ほめる(認める)ことです。最初は手を添えたり、見本を示しながら、徐々に確実にできるようにしていきます。丁寧にやさしく何度でも教えてあげてください。

毎日の活動	朝、カーテンを開ける 夕方、カーテンを閉める 暗くなったら電気をつける 誰もいない部屋の電気を消す 新聞を郵便受けから取ってくる 郵便物を取ってくる 牛乳等の日配品を取ってくる 家族を起こす 日めくりカレンダーをめくる 玄関の靴を並べる ペットの散歩をする ペットにえさや水をあげる	買い物	商品をカートやかごに入れる カートを押したり、かごを持つ 指示された商品をもって来る レジに並ぶ お金を渡す おつりをもらう 買った商品をふくろに入れる 買った商品を車や家まで運ぶ 買った商品を仕分けして片付ける 一人で指示された品物を買ってくる
	食事の準備	テーブル(食卓)をふく テーブルの上を片付ける お箸やスプーンなどを配る おかずやご飯を配る ご飯を茶碗によそう おかずをお皿に盛りつける 牛乳やジュースをコップに注ぐ 「ごはんだよ」と家族に知らせる	掃除
料理	炊飯器のスイッチを入れる 食洗機のスイッチを入れる 電子レンジのあたためボタンをおす 米を磨いで炊飯器で炊く ラップをはずす 食品を袋から出す パンにバターやジャムをぬる ゆでたジャガイモをつぶす レタスなどの野菜や海苔等をちぎる 玉子をわる ゆで玉子のカラをむく 泡立て器や菜箸で混ぜる ハンバーグやコロケのたねをこねる・丸める 「あく」をすくう ナベをかきまぜる 調味料やドレッシングをかける 皮むき器やピーラーで野菜の皮をむく タマネギやバナナの皮をむく 野菜を大きく切る 味噌汁や卵焼き等の簡単な料理を作る 食べた後の食器を流しに運ぶ 自分が食べた食器を洗う 食器をすすぐ 洗った食器をふく 食器を食器棚に入れる 食洗機から食器を取り出す お皿等にラップをかける 冷蔵庫に食品をしまう ふきんをあらう ふきんをほす	家の外の手伝い	庭先や玄関前を掃く 庭の草むしりをする 枯れ草や落ち葉を掃除する 雪かきをする 花壇に水をやる 畑の草取りをする 畑に肥料をまく 畑の石をひろう 野菜等の収穫を手伝う 農作業を手伝う
	洗濯	洗濯物を洗濯かごに入れる ポケットの中のものを取り出す 洗剤を入れる 洗濯機のスイッチを入れる 洗濯物をほす 洗濯物を取り入れる ハンカチやタオルをたたむ 服をたたむ きれいになった洗濯物を仕分けする 洗濯物を引き出し等にしまう	弟妹の世話 その他

＜自己表現の大切さと指導＞

発達に遅れや偏りのある子ども達も、感性や感情は、ふつうの子ども達と何も変わりません。小学部の高学年頃からは、心も身体も思春期に入ります。この時期の子ども達の心の中は、自分でもどうしたいのかわからないグチャグチャの状態です。中には反抗的な態度をとったり、無気力な態度を示すこともあります。子どもにとって、思春期の心の壁は自分で乗り越えなければいけない大切な成長のステップです。「言われたとおりにしなさい」「悩んでもムダ」と、大人側の答えを押しつけては、自主的、主体的に暮らすことのできる人に育てることはできません。自分の心を整理したり、それを相手に伝えたりすることができるように支援・指導することも、この時期の子ども達には必要です。自己を適切に表現できることで、キレたり、パニックになったりすることから回避できるようになります。

1 子どもが安心して自分の心を表現できる環境をつくるのが最も大切

子ども達が、自らを安心して表現することができるためには、それを受け止めてくれる受容的な環境が必要です。「ぼかぼかしたあたたかい学級」であり、助けを求めたときに確実に受け止めてくれる「弱音を吐ける家庭」がなければ、自分の気持ちを素直に表現することは難しいです。また、自分を受け止めてくれる大人の存在が大切なのです。

2 自己表現していく3つのプロセス

子どもの心を育てる「自己表現」を行うためには、次の3つのプロセスが必要です。

(1) 自分の気持ちにいてねいに意識を向ける時間・空間をもつ

子ども達は、時間に追われた生活をしています。「早く食べなさい」「早く来なさい」など、絶えず急がされている状態では、ゆっくと考えることもできません。

(2) 自分を表現する（気持ちや浮かんできたイメージなどを表現する）

自分を表現することは、気持ちに「かたち」を与えることです。モヤモヤした気持ちを「ことば」という「かたち」で表現すると、「そうそう、こんな感じ」「なんだ、そういうことか」と、自分の気持ちから距離を取ることができ、それが、子ども達の安定につながるのです。

(3) 自分や友だちが表現したものを分かち合う

「表現したもの」には、一人一人の子どもらしさが表れるものです。それを友だちと分かち合うことは、自分や友だちを理解するだけでなく、あたたかな「心の交流」にもつながります。「B太くんは、ぼくと同じことが好きなんだ」とか「A美ちゃんは、いつもそう思っていたのか」など、表現したものを共有することで、「安心感」や「つながり」を実感することができます。そして、このような中で自分を確認することで、自己肯定感や自己理解、他者理解などを育てることができるのです。

3 自己表現は機会をとらえて、継続的に、無理せず行う

朝の会や帰りの会で、「今日のできごと・ニュース」を児童生徒に話させる学級は多いのではないのでしょうか。また、行事の事前・事後学習では、児童生徒の感想を話させることも多いのではないかと思います。しかし、「なかなか話せない」「単語しかしゃべれない」などの悩みもあるのではないのでしょうか。自分の気持ちを話すことは、とても勇気のいることです。教師がイライラと時計を気にしながら「何でもいいから早く話さない」では、自己表現はできないのです。

＜自己表現を促すための指導のヒント＞

《留意事項》

- ・子どもの気持ちを否定したり、批判しない
- ・無理に表現させない（その場に参加しているだけでも良い）
- ・「○○なんだね」と言葉にして伝える
- ・子どもが書いたもの（プリント）を大切に扱う
- ・「なぜ」と問い詰めない

ヒント1：今の気持ちを「表情カード」で伝える

「楽しい」「イライラ」「かなしい」などの気持ちを絵カードを示して伝えたり、適切な表情を学ぶ。



*「表情カード」は、当センターのコンテンツ集からダウンロードできます。また、市販されているものもあります。

出典：いわて教育情報ネットワーク 教育用コンテンツ集
http://www.i.wate-ed.jp/kakusitu/joho/contents/ed_vod/

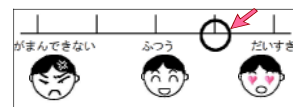
ヒント2：教師が見本を示す

「今日の○○さんの良かったこと」等を教師が話し、自信をつけたり、発表の見本になる。徐々に子ども達が話せるようにする。

ヒント3：カードや写真等を使いながら選択する機会を増やす
行事の事前学習などで、「どこに行きたい？」と言葉で聞いても、答えられないことが多い。行き先等の写真を多く用意し、「これとこれならどっち？」と「では、ここではこれとこれのどっちをする？」などと、考える材料を与える。「どちらもイヤ」という回答も用意する。

ヒント4：ワークシートやプリントを用いる
私の「好きなこと」「イヤなこと」「リラックス法」「やってみたいこと」等を短い文や単語、または、イラストや写真を切り抜いて表現する。

ヒント5：今の状態を「気持ちのものさし」で表す
下の図のような数直線上に○をつけさせ、自分の今の気持ちの状態を表現させる。朝の会や帰りの会等で今日の状態や一日の振り返り等に用いてもよい。



【参考】「教室で 保健室で 相談室で すぐ使える！とじ込み式自己表現ワークシート」諸富祥彦監修
「ストレスマネジメント フォキッズ 小学生用」ストレスマネジメント教育実践研究会編

【資料7】

＜性教育の大切さと指導＞

児童生徒に正しい性についての知識を教え、被害にあうことを防いだり、他の人に迷惑をかけることのないように教えるのは、学校の大切な役割です。障害のある児童生徒は、周囲の人に自分が受けた被害を話すことができなかつたり、他人が悪意をもって近づいているのかどうか判断したりすることができないことがあります。性的な虐待や性犯罪（援助交際を含む）の危険から、児童生徒を守るためには、周囲の大人（教師）が子ども達の性的な発達や環境に気を配り、正しい知識と行動を教える必要があります。

1 無知が一番こわい

「自分に子どもができたのを知らなかつた」「兄が見ていた本に書いてあつたのでまねしたら警察に連れて行かれた」「やっていけないとは知らなかつた」「誰に何と話せばよいかわからなかつた」など、正しく知っていれば防げたであろう事件に巻き込まれた事例は数多くあります。

何も教えないことは、児童生徒に身を守る方法を教えないことと同じです。「どうせわからない」「家庭がやればよい」「下手に教えない方がよい」というのは責任の転嫁です。学校は社会のルールと生きるすべを学ぶところと言われるように、社会に出るために必要なことや自己の尊厳を守って生きるために必要なことは、学校がしっかりと教えるべきなのです。

2 性教育は、組織的、系統的に行う

性教育は、小学部の段階から、組織的、系統的に行われる必要があります。家庭、寄宿舎、学校が同じ方針や方法で指導しなければ児童生徒は、どうすれば良いのかわからず正しい行動が身に付きません。また、小学部、中学部、高等部でそれぞれの役割を明確にして、系統的、発展的に積み上げていくようにしなければ、教えないでしまうことができてしまつたり、十分な成果をあげることができないでしまいます。

保健指導に関する年間指導計画に性教育を明確に位置付けたり、性教育の全体指導計画等を作成するなどして、教職員や保護者等の十分な共通理解を得ることが必要です。

3 学部段階別指導内容（例）

	小学部低学年	小学部高学年	中学部	高等部
自分自身に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・私の誕生日 ・身近な動物に接する 	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちの誕生日 ・身近な動植物を育てる 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちや家族の誕生日 ・生命の大切さ 	<ul style="list-style-type: none"> ・生命の誕生 ・生命の尊重 ・健康で安全な生活
側身面的	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の名前 ・トイレの場所の区別、利用の仕方 ・身体の清潔 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きくなる身体 ・トイレ、更衣場所等の区別 ・身体の清潔 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の身体の成長に関心をもつ ・身体と身の清潔 ・思春期の身体の変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・思春期の身体の発育と健康(月経の手当てと過ごし方、射精の対応と知識) ・清潔と衛生
側精神面的	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の性別 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの性別 	<ul style="list-style-type: none"> ・思春期の心の変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・思春期の心の変化(性衝動のコントロール) ・欲求やストレスの対処 ・余暇の利用の仕方
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・仲良く遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲良く活動する ・友だちと仲良く助け合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと協力して活動する ・男女の協力 ・異性との接し方 	<ul style="list-style-type: none"> ・節度ある異性とのかかわり ・異性の尊重と共感 ・対人関係の礼儀作法 ・話し方や聞き方などの意思伝達の方法
一員として	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭での手伝い ・公共施設の利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族構成を知る ・家庭での手伝い ・集団での役割 ・公共施設の使い方に慣れる ・社会のルールに気付く 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の一員としての役割を身に付ける ・他者への思いやり ・公共施設を利用するマナー ・社会のルールを身に付ける ・性被害の防止 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の将来 ・家庭における男女の役割 ・地域社会における人間関係 ・性被害、加害の防止 ・性犯罪や性的問題行動(性に関する情報の対処法)

【引用：「性教育の手引き」～盲・ろう・養護学校編～ 東京都教育委員会（平成17年）】

4 指導にあたっての留意事項

- 年間指導計画を立てて指導する
- 具体的な指導内容や教材等の使い方を明らかにする
- 発達年齢より生活年齢に即して指導を行う
- 小さいときからプライベートゾーンを繰り返し教える
- 個人的空間、他人との距離の取り方を教える
- インターネット等の仮想社会と現実社会の違いを教える など

【資料8】

＜ソーシャルスキルトレーニング＞

ソーシャルスキルとは、「social skills」の訳語で、「生活技能」「社会的技能」と訳されることもあります。ソーシャルスキルは、社会生活や対人関係を営んでいくために必要とされる技能であると言われていています。技能ですので、練習することで身に付けることができます。高機能自閉症やADHD、LD等の児童生徒は、ソーシャルスキルが身に付いていなかったり、知らなかったりするために、友達関係や集団生活で不利を被っています。ソーシャルスキルを具体的に「やり方」や「コツ」として教えることで、子ども達の生活をより豊かになるように支援するのがソーシャルスキル指導です。

ソーシャルスキルの指導領域
<ul style="list-style-type: none"> ○集団行動 ○セルフコントロール ○仲間関係 ○コミュニケーション

グループ構成のチェック項目
<p>1 年齢が近い ・本来は同学年がベスト</p> <p>2 遊び、趣味が合う ・活発に動くタイプ、おとなしい、パソコンが好き、話題など</p> <p>3 知的水準が一致している</p> <p>4 行動、情緒の問題が深刻でない ・不安、混乱、人間不信が強い場合は、グループ指導は不適</p>

ソーシャルスキルトレーニングの指導領域には、左の表のような領域があります。一人一人の発達の状態に合わせながらも、その生活年齢に必要なソーシャルスキルを身に付けられるようにすることが大切です。

しかし、子ども達がソーシャルスキルを使えるようになるためには、ソーシャルスキルトレーニングで「やり方」や「コツ」を覚えるだけでは十分ではありません。本人を取り巻く環境、情緒面、子どもの特性を考慮する必要があります。

ソーシャルスキルトレーニングは、ゲーム的な要素を入れて、楽しく取り組むことができますが、般化につなげるためには、本人の動機付け（「みんなと仲良くしたい」等）が最も大切です。

ソーシャルスキルトレーニングは、3～10人の小集団で行うと、楽しく取り組むことができます。同じ学級でできると良いのですが、能力や特性

のばらつきが大きい場合は、左の表のグループ構成のチェック項目を参考にし、グループを作ります。

左図は、ソーシャルスキルトレーニングの流れの例です。

ソーシャルスキルトレーニングをとおり、本人に自信を付け、実際の生活場面でそのスキルが活用できるようになることが目的です。学んだスキルを生活の中で活用できるように、環境を調整したり、場面をとらえて指導するようにします。

実際の指導にあたっては、ウォーミングアップの時間や運動、ゲームを取り入れながら、楽しくまたソーシャルスキルの大切さを実感させながら行うよう留意します。

【参考】

「特別支援教育 実践ソーシャルスキルマニュアル」上野一彦、岡田智著

「ちゃんと人とつきあいたい～発達障害や人間関係に悩む人のためのソーシャルスキルトレーニングライフステージ別50の実例でわかる」井澤信三ら編著

＜ソーシャルスキルトレーニングの流れ＞



【引用】「ちゃんと人とつきあいたい」井澤信三ら著より

【資料9】

＜実習の評価と巡回指導のポイント＞

1 実習の評価について

(1) 評価表作成の留意点

実習は、日常の作業学習で学んだことをより実際的な場（校内実習）や実際の職場で試してみたり、実際の就職に向けての移行的な位置付けであったりします。実習（校内実習、産業現場等における実習）の評価に当たっては、その実習の目的や内容にあったものであることや、評価する人にとってわかりやすいものであることが必要です。実習の評価表を作成するにあたっての留意点を以下にまとめます。

＜評価表を作成する場合の留意点＞

① 実習の目的が明らかになっているか	… 体験なのか、移行（就職）を目的とした実習なのか（実習の目的によって、評価表をわけてもよい）
② 目的に沿った内容になっているか	… 移行（就職）を目的とした実習の場合には、家庭等からの通勤や家庭の支援の状況（持ち物や金銭管理等）も評価の項目に入れる
③ 日常の作業学習の評価との関連性はどうか	… 評価項目や文章表現などは、日常の作業学習の評価項目（作業日誌）と同じであると、関連性や明確になり、本人にもわかりやすい
④ 具体的な作業内容が入っているか	… 作業態度や遂行状況等の一般的な評価項目以外に、その業種や仕事に必要な作業内容についても評価できるように工夫すると、同じ職場で同じ仕事内容を行ったときとの比較ができたり、本人により具体的な目標をもたせたりすることができる
⑤ 評価者（本人・実習先・保護者等）にとってわかりやすいものになっているか	… 評価項目の内容や表現がわかりやすくなっているか、評価の段階についての基準が明確になっているか、また記入の負担が大きすぎないかも大切なポイント
⑥ どのように活用するかを明確にする	… 実習先から届いた評価表を家族には見せても、本人に見せなかったり十分に説明しなかったりすることが時々見受けられる。主体はあくまでも本人。本人がわかるような評価表を作成し、次の実習や日常の作業学習にどのように活かすかを予め明確にする

(2) 家庭用チェックシートで生活についても評価する

＜生活・服装チェック表＞

【実習の服装】 上 … 白いTシャツと会社のYシャツ
 下 … スラックス（学校の制服、ジーンズはだめ）
 くつ … はき慣れた疲れにくいもので汚れていないもの

*毎日、出かける前に鏡を見て、服装を確かめよう。
 できていたら、○をつけよう。

項 目	9/1	9/2	9/3	9/4
決められた時間に起きましたか				
顔を洗いましたか				
歯を磨きましたか				
朝食は食べましたか				
つめは、清潔で短く切っていますか				
白いTシャツは汚れていませんか				
会社のYシャツに汚れはついていませんか				

【参考】「改訂版 より良い現場実習に向けて 実習マニュアル手引書」神奈川県立総合教育センター

実習中は、いつもと違う登校（出勤）時間であったり、服装が違ったりと、より実際的な社会生活を想定した日程になっています。卒業後、家庭から一人で準備をして、仕事に行けるようになるためには、家庭（寄宿舎等）での生活についても、評価する必要があります。

左図のようなチェック表を作成し、実習に行くための準備を一人でできるように支援することも、実際的な自立に向けた一歩です。また、保護者にとっても、どう支援すればよいかわかるので、家庭との連携もしやすくなります。

2 巡回指導について

＜巡回指導十カ条＞

- ① 現場実習は、先方の好意により実施できます。十分気を引き締めて望みましょう
- ② 巡回時の服装はきちんとしましょう
- ③ 実習先住所・電話番号の確認、道路状況・駐車場の有無を調べるなどの事前準備をして余裕をもって臨みましょう
- ④ 約束の10分前以上の訪問や遅刻は先方に失礼です。時間の誤差の少ない交通手段を利用すると良いでしょう
- ⑤ 巡回指導の回数・時間は、事前に先方と打合せ、必要最低限で効率よく行き、先方の迷惑にならないように心がけましょう
- ⑥ 実習生には、〇ちゃんなど呼ばずに、社会で通用する呼称をしましょう
- ⑦ 実習にあたっては、家庭や個人の情報については、必要最低限の提供にとどめましょう。ただし、本人を支援するための方法等については、積極的に助言や依頼をしましょう
- ⑧ 巡回指導で得た情報は、情報交換の場を設け、学校教職員で共有し、先方とトラブルのないようにしましょう
- ⑨ ビデオや写真の撮影は、事前の許可だけでなく、必ずその場でも許可を受け、実習生以外は撮らないように配慮しましょう
- ⑩ 問題が発生したときは、その場で学校へ連絡し、速やかな対応を心がけましょう

【参考】「改訂版 より良い現場実習に向けて 実習マニュアル手引書」神奈川県立総合教育センター

産業現場等における実習で巡回指導を行う際には、左図のようなことに留意します。また、保護者が実習先を見学する場合にも同様のことを打ち合わせます。

実際の採用の決め手には、本人のがんばりだけでなく、周囲の人（家庭、学校）の支援状況や信頼できるかどうかの影響することもあるのです。

【資料10】

＜インリアルアプローチの紹介＞

医療的ケアの子ども達や肢体不自由を併せもった子ども達の中には、ことばを話さない（前言語期の）児童生徒も多くいます。しかし、「～したい」という意図は生後早い時期から出現すると言われ、子ども達は音声や表情、身体の動きで表そうとします。そういった子どもの意図を聞いてあげることが必要で、聞いてもらえるという喜びが子どもの次の自己表現への意欲につながり、さらにそのことがコミュニケーション能力を高めていくことになります。

インリアルとは「Inter Reactive Learning and Communication」の略で、その意味は、大人と子どもが相互に反応し合うことによって、ことばとコミュニケーションの学習をすすめるようとするものです。特徴は「日常的な生活のやりとり（会話・遊び）をとおしてことばを学ぶ」ということと「子どもとうまくコミュニケーションが取れないのは、子ども側よりもむしろ大人側が子どものサインを見誤ったり、聞き逃したりするためであり、大人側のコミュニケーション能力を高めることで、子どもの能力を高める」ということです。また、実践を支える手法としてビデオ分析が用いられるのも特徴です。

インリアルアプローチの手法は、ことばをもたない重度の子どもから、ことばの使い方に軽度の課題のある子どもまで幅広く用いられています。

1 子どもとコミュニケーションをうまく進めるための原則 (Grice, 1975「会話の公理」)

- ① 子どもの発達レベルに合わせる
- ② 会話や遊びの主導権を子どもにもたせる
- ③ 相手が始められるように待ち時間をとる
- ④ 子どものリズムに合わせる
- ⑤ ターン・テーク（やりとり）を行う
- ⑥ 遊びや会話を共有し、コミュニケーションを楽しむ

インリアルアプローチでは、子どもから始められる力（開始）をもつことを目標としています。そのために、大人からの開始を少なくし、反動的にすることで子どもに始めるチャンスを与えていきます。子どものもつ潜在能力を信じ主体性を大切にしているのがポイントです

2 かかわりの基本姿勢「SOUL」～大人がとるべき基本姿勢～

- 「S」沈黙 (Silence)：子どもの行動を静かに見守る。つまり教師（親）の考え方に子どもを従わせるのではなく、子どもが主導的であるように仕向ける。子どものしたい事をみとる
- 「O」観察 (Observation)：子どもの状態を知る。コミュニケーション、気分、体調等もみとる
- 「U」理解 (Understanding)：観察した事柄を今までのその子どもに関する情報に照らし合わせて理解
- 「L」聞くこと (Listening)：単に耳で聞くだけでなく、子どもに話が進んでいることをわからせるように、うなずいたり、身振りや、ことばで子どもにフィードバックする。子どもが話してきたら、子どもが自分で話し終わったと感じるまで、ちゃんと聞いてあげることが大切

3 実践のための基本的な技術（言語心理学的技法）

- ミラリング：子どもの行動をそのまままねる
- モニタリング：子どもの音声やことばをそのまままねる
- パラレル・トーク：子どもの行動や気持ちを言語化する
- セルフ・トーク：大人の行動や気持ちを言語化する
- リフレクティング：子どもの言い誤りを正しく言い直して聞かせる
- エキスパンション：子どものことばを意味的、文法的に広げて返す
- モデリング：子どもが使うべきことばのモデルを示す
- ＜補足的技法＞
- 質問：質問することで子どもに話すチャンスを与えたり話題を展開したりする
- 提案：提案することで子どもの文脈に沿って、遊びや話すすすめる

ことばの意味がまだ分かりにくい段階の子どもには、ミラリングやモニタリングが効果的に働きます。

コミュニケーションにおいては、言語心理学的技法に加え、視線を合わせてことばをかけること、ことばがけに指さしを添えること、表情を豊かに使うことなど、ノンバーバルサインの使用も大切です。

4 子どもの意図を読み取ることの大切さ

- 【例】子どもが電車やバスなどのミニカーを使って遊んでいました
- 子ども：大人の方を見てニコニコしながら、「おもちゃを投げ『アッ』
と言う
- 母親A：「たいくつね。お母さんも一緒に遊ぼうね」
- 母親B：「おもちゃを投げたらダメ！」
- 伝達行為 「おもちゃを投げ『アッ』」
- 意図行為 こっちを見て（注意喚起）
- 結果A 子ども：大人が見てかかわってくれる（うれしい、伝わった）
母親A：子どもを見て遊ぶ、遊びに共感する
- 結果B 子ども：見てもらえず、叱られる
母親B：子どもを叱る（子どもの意図に注目していない）

子ども側から、何らかの働きかけがあったときに、大人がどのように行動するかで、子どもとの「信頼関係」を結ぶことができるか、子どもとコミュニケーションを取ることができるかが決まります。

伝達手段を多くもたない子どもでは、その方法が必ずしも一般的でないことが多く、左図の母親Bのようにとらえてしまうこともあるかもしれません。障害のある子どもの真の意図を理解しようとするときには、手段と意図を分けて見ることがポイントです。

【参考】「実践インリアル・アプローチ事例集～豊かなコミュニケーションのために～」竹田契一監修
「コミュニケーション支援の世界～発達とインリアルの視点を取り入れて～」坂口しおり著

<引用・参考文献等>

第1部 キャリア教育を組織的に推進するために

- 国立特殊教育総合研究所(2005)「知的障害養護学校における職業教育と就労支援に関する研究」
文部科学省(2006)「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/06122006.htm
文部科学省(2006)「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議 報告書」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/06122007.htm
文部科学省(2004)「キャリア教育の推進に関わる総合的調査研究協力者会議 報告書」
亀井浩明・鹿嶋研之助(2006)「小中学校のキャリア教育実践プログラム」, ぎょうせい
三村隆男著(2004)「キャリア教育入門」, 実業之日本社
吉田辰雄編著(2006)「最新 生徒指導・進路指導論 ガイダンスとキャリア教育の理論と実際」, 図書文化
仙崎武(1985)「進路指導の評価の方法」, (財)日本進路指導協会
岩手県立花巻養護学校 平成18年度「学校要覧」
岩手県立前沢養護学校 平成18年度「学校要覧」

第2部 キャリア教育を系統的に行うために

- 阿部芳久著(2006)「知的障害児の特別支援教育入門 授業とその展開」, 日本文化科学社
細村迪夫著(2000)「障害児教育の教育課程」, コレール社
全国特殊学校長会編集(2005)「盲・聾・養護学校における『個別的教育支援計画』ビジュアル版」, ジアース教育新社
文部科学省(1998)「中学校学習指導要領」, 国立印刷局
文部省(1995)「作業学習指導の手引き(改訂版)」, 東洋館出版
文部省(1994)「日常生活の指導の手引き(改訂版)」, 慶應義塾大学出版
岩手県教育委員会(2007)「学校教育指導指針(小学校・中学校, 高等学校, 特別支援学校)」, 岩手県教育委員会
吉田辰雄編著(2006)「最新 生徒指導・進路指導論 ガイダンスとキャリア教育の理論と実際」, 図書文化
海津亜希子著(2007)「個別の指導計画作成ハンドブック LD等, 学習のつまづきへのハイクオリティな支援」, 日本文化科学社
全国知的障害養護学校長会編著(2007)「特別支援教育の未来を拓く 指導事例navi 知的障害教育 1 小学部編」, ジアース教育新社
全国知的障害養護学校長会編著(2007)「特別支援教育の未来を拓く 指導事例navi 知的障害教育 2 中学部編」, ジアース教育新社
全国知的障害養護学校長会編著(2007)「特別支援教育の未来を拓く 指導事例navi 知的障害教育 3 高等部編」, ジアース教育新社
愛知県教育センター(2004)「特殊学級(知的障害)教育課程案」, 愛知県教育センター
<http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/tokusyugakkyu/katei.htm>
上岡一世著(1990)「指導年齢がわかる 社会自立のための指導プログラム」, 明治図書
上岡一世著(2006)「指導年齢がわかる 自立と社会参加を実現する個別の指導プログラム」, 明治図書
近藤原理(1995)「段階式 発達に遅れがある子どもの国語 1 ひらがな・単語編」, 学研
近藤原理(1995)「段階式 発達に遅れがある子どもの国語 2 カタカナ・漢字・文章編」, 学研
藤原鴻一郎監修(1995)「段階式 発達に遅れがある子どもの算数・数学 1 数と計算編」, 学研
藤原鴻一郎監修(1995)「段階式 発達に遅れがある子どもの算数・数学 2 量と測定編」, 学研
飯田 雅子 鉄道弘済会弘済学園(1998)「段階式 発達に遅れがある子どもの日常生活指導 1 食事指導編」, 学研
飯田 雅子 鉄道弘済会弘済学園(1998)「段階式 発達に遅れがある子どもの日常生活指導 2 着脱・洗面・入浴編」, 学研
飯田 雅子 鉄道弘済会弘済学園(1998)「段階式 発達に遅れがある子どもの日常生活指導 3 排泄指導編」, 学研
坂口しおり著(2007)「障害の重い子どものコミュニケーション評価と目標設定」, ジアース教育新社
坂口しおり著(2007)「コミュニケーション支援の世界 発達とインリアルの視点を取り入れて」, ジアース教育新社
厚生労働省(2006)「就労移行支援のためのチェックリスト」 <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/08/dl/h0823-1a.pdf>
小林芳文ら著(1992)「乳幼児と障害児の感覚運動発達アセスメント マニュアル」, コレール社
津田 望ら監修(1998)「認知・言語促進プログラム NCプログラム」, コレール社
E・ショプラー著 茨木俊夫訳(1995)「新訂 自閉症・発達障害児教育診断検査」, 川島書店
日本AAPEP研究会 著(1997)「青年期成人期自閉症教育診断検査」, 川島書店

- 太田 昌孝ら編著(1992)「認知発達治療の実践マニュアル 自閉症のStage別発達課題」, 日本文化科学社
 津守 真ら著(1961)「津守一乳幼児精神発達診断法 0～3歳まで」, 大日本図書
 三木安正監修(1980)「新版 S-M社会生活能力検査」, 日本文化科学社
 文部省(1991)「特殊教育諸学校小学部・中学部学習指導要領解説—養護学校(精神薄弱教育)編」, 東洋館出版

第3部 キャリア発達を促す指導・支援の基本的な在り方

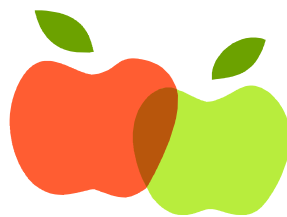
- 上岡一世著(1994)「就労自立を果たす指導法① 日常生活動作編」, 明治図書
 上岡一世著(1998)「就労自立を果たす指導法③ 働くことの指導編」, 明治図書
 一番ヶ瀬康子監修(1998)「知的障害児・者の生活と援助 援助者へのアドバイス 新訂版」, 一橋出版
 阿部利彦著(2006)「発達障がいを持つ子の『いいところ』応援計画」, ぶどう社
 飯田雅子編著(1991)「弘済学園の教材とその活用法 児童期編」, 学研
 飯田雅子編著(1992)「弘済学園の教材とその活用法 青年期編」, 学研
 吉田辰雄・篠 翰著(2007)「進路指導・キャリア教育の理論と実践」, 日本文化科学社
 渡辺三枝子・E.L.ハー著(2001)「キャリアカウンセリング入門 人と仕事の橋渡し」, ナカニシヤ出版
 渡辺三枝子編著(2003)「キャリアの心理学 働く人の理解く発達理論と支援への展望」, ナカニシヤ出版
 太田正己著(2003)「名言と名句に学ぶ障害児教育と学級づくり・授業づくり」, 黎明書房
 上野一彦ら著(2005)「軽度発達障害の心理アセスメント」, 日本文化科学社
 藤田和弘ら著(2005)「WISC-Ⅲアセスメント事例集」, 日本文化科学社
 松原達哉編著(2002)「第4版 心理テスト法入門」, 日本文化科学社
 藤田和弘ら著(1998)「特殊学級・養護学校用 長所活用型指導で子どもが変わる」, 図書文化社

第4部 キャリア教育実践資料

- 梅永雄二著(2002)「LD(学習障害)の人の就労ハンドブック」, エンパワメント研究所
 柘植雅義ら著(2007)「発達障害の子を育てる家族への支援」, 金子書房
 松為信雄ら編集(2006)「職業リハビリテーション学 [改訂第2版] キャリア発達と社会参加に向けた就労支援体系」, 協同医書
 高橋智編集代表(2007)「インクルージョン時代の障害理解と生涯発達支援」, 日本文化科学社
 文部省(1995)「作業学習の手引き(改訂版)」, 東洋館出版社
 松石豊治郎ら編(2006)「医療的ケア研修テキスト」, クリエイツかもがわ
 坂本洋一(2006)「図説 よくわかる障害者自立支援法」, 中央法規
 上岡一世著(2006)「指導年齢がわかる 自立と社会参加を実現する個別の指導プログラム」, 明治図書
 本郷一夫編著(2006)「保育の場における『気になる』子どもの理解と対応」, プレイン出版
 諸富祥彦監修(2005)「教室で 保健室で 相談室で すぐに使える! とじ込み式自己表現ワークシート」, 図書文化
 ストレスマネジメント教育実践研究会編(2003)「ストレスマネジメント フォキッズ 小学生用」, 東山書房
 上野一彦ら著(2006)「特別支援教育 実践ソーシャルスキルトレーニング」, 明治図書
 井澤信三ら編著(2007)「ちゃんと人とつきあいたい～発達障害や人間関係に悩む人のソーシャルスキルトレーニング」, 山海堂
 本田恵子著(2007)「キレイやすい子へのソーシャルスキル教育, 教室でできるワーク集と実践例」, ほんの森出版
 北沢杏子著(2005)「知的障害をもつ子どもの性教育・性の悩み Q&A」, アーニ出版
 竹田契一監修(2005)「実践インリアル・アプローチ事例集」, 日本文化科学社
 坂口かおり著(2006)「障害の重い子どものコミュニケーション評価と目標設定」, ジアース教育新社
 坂口かおり著(2006)「コミュニケーション支援の世界 発達とインリアルの視点を取り入れて」, ジアース教育新社

【岩手県立総合教育センター】

- 前川岳詩(2005, 2006)「将来を見つめ自らの生き方を考える力を育てる小学校キャリア教育の推進に関わる研究」
http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryu/h18/h18_15b5.pdf
 佐藤修子(2006, 2007)「知的障害のある児童生徒が在籍する特別支援学校における組織的、系統的なキャリア教育の在り方に関する研究」
http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryu/h19/h19_18b4-01.pdf



～知的障害のある児童生徒が在籍する特別支援学校のためのキャリア教育推進ガイドブック～
「特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック」
実践・資料編

問い合わせ：岩手県立総合教育センター
特別支援教育室
電話：0198-27-2821（直通）

平成20年3月25日

*本ガイドブックは以下のアドレスからダウンロードできます。
<http://www1.iwate-ed.jp/tantou/tokusi>